

---

---

## 臨床社会学の方法

### (35) 行方不明の<加害者>たち

#### —コミュニケーションの微細な懸隔—

中村 正

---

---

#### 1. Stay Home とエッセンシャルワーカー エッセンシャルワーカーとは誰か

コロナ禍でエッセンシャルワーカーやエッセンシャルワークという言葉が普通に使われるようになった。エッセンシャルワークを無理に訳せば「それがなくては人が生きていけない社会の基幹的な仕事」だろうか。私たちの日常生活における必要不可欠な仕事（エッセンシャルサービス）やそれを担う労働者という意味である。テレワーク、ソーシャルディスタンスの言葉とともにウィズ・コロナ、ポスト・コロナ時代を生きるための新しい言葉である。

ではどんな仕事をしている人たちなのか。健康と命を担う医療・福祉従事者、スーパー等の小売業界で働く人、物流に関する郵便配達員やトラック運転手、ライフラインに関わる仕事に就く人等、日常生活を支えている職種の人たちがエッセンシャルワーカーだと指摘されている。

もちろんそうした言葉がなくても元々生活を支えてきた人たちだ。エッセンシャルワークやワーカーは常に存在してきた。コロナ禍で改めて敬意を表し、正当な評価をすべきだということだろう。しかし数え上げられていないエッセンシャルワーカーが

いることを無視できない。それは主婦である。家事、育児、介護を家庭内で担うことやその担い手は、エッセンシャルワークの類型には入っていない。主婦や母親、つまり女性たちは Stay Home を支えた人であるにもかかわらずだ。Stay Home 政策は感染拡大を止めるための大事な生活の仕方だとすると、その Home を維持する人は最もエッセンシャルだといえるだろう。

参考にこの課題について記したものを末尾に掲げておきたい。「東京都女性相談センター通信」第 42 号（2020 年 9 月発行）に掲載したレポートである。Stay Home で家族の安全が保てなくなる事案が DV や虐待等であり、家族の誰かがその Home の維持にいままで以上に努力することになるので、DV や虐待が増えることの心配もあり、センターに依頼されて書いたものだ。その箇所を引用しておく。

コロナ禍で Stay Home といわれている。仮に、留まりたくない家庭だったらどうすればいいのかという想像力は大切だ。DV や虐待がある家庭の被害者にそれでも留まれといえるのか。家を出た方がいい家庭もあるし、暴力ですでに避難している人もいる。もちろん DV 問題だけではなく一般的

にもコロナ対策と家族について考えるべきことは多い。テレワークが推奨され、学校にいけずにオンライン学習となると、Home は生活まるごと抱え込む。そこをいったい誰がキープするのだろうか。女性依存・妻依存・母依存の様子が目に浮かぶ。Stay Home の新しい生活様式は、古くからある家族主義を強化しただけなのかも知れない。コロナ対策もそうだが、世帯を単位に福祉サービス等が構成されている。たとえば10万円の特定定額給付金政策がある。先の相談件数にはこの点に関する問い合わせは除かれている。実はこの問い合わせにこそDV問題が含まれているだろう。相談の実数は先の数字より多いだろう。DVや虐待で家族から逃れている女性や子どもは現住所以外に住んでいるはずなのできちんと本人に渡っただろうか。マスクの配布もそうだったが、これらはすべて『世帯単位』だった。その世帯に暴力等の様々な困難が含まれている人たちはどうだったろうかと考えてみる」と。そしてこのようにも書いた。「なかでもDVや虐待は、コロナ禍だから増えたということだが、もともとそこにあった問題が顕在化している面もある。しかし、悪化している面も無視できない。①脆弱さに拍車がかかること、②隠蔽されていた女性の貧困が家庭に閉じ込められるのでより深刻になること等、コロナ禍で家族に閉じ込められていた見えない問題が浮かびあがってきたということだろう。いくつかの社会病理も含めていけばジェンダーをとおして家族に問題を閉じ込めてきたという意味での『家族のダークサイド』の存在である。

伝統的で元来のエッセンシャルワーカーである主婦は、コロナ禍のStay Homeでその役割を大きくした。だから多様に例示される仕事のなかに主婦が名指しされないというのはネグレクト(無視)でしかない。存

在しているのに言葉が届かないという事態は、「沈黙化作用」という。この連載でも「サイレンシング」(『臨床社会学の方法(10) サイレンシング(沈黙化作用) —語られていないこと・語りえないものがあることへの配慮—』『対人援助学マガジン』Vol.6 No.2 (通巻第22号)、2015年9月)として取り上げた。一貫してシャドウワークであり続けているともいえるだろう。

## 2. 行方不明の<加害者>とは

さらに体系的に同様のことを、レベッカ・ソルニットは『わたしたちが沈黙させられるいくつかの問い』(ハーン小路恭子訳、左右社、2021年)や『説教したがる男たち』(ハーン小路恭子、左右社、2018年)で詳述している。「支配的な人間には、自分は見えても他者は見えない」(ソルニット2021:73)という。当たり前すぎて評価されにくい家事、育児、介護等の家庭内エッセンシャルワーカーはいつも無視されている。ここには認知的不正義という事態が生起している。

このことは本連載でも別に紹介した。存在しているのに言葉がないのである。ここには嫌悪ではなく賞賛しつつも認知されないという複雑なミソジニーが介在しているといえるだろう。これはケイト・マン著/小川芳範訳『ひれふせ、女たち:ミソジニーの論理』(慶應義塾大学出版会2019年)の指摘である。この研究はミソジニーの現実を詳細に日常生活に即して描き出したものだ。ミソジニーは「女嫌い」と訳すとその全貌がみえてこない。逆の面も含む。つまり女らしさを讃え、称揚することのなかにもミソジニーは顕在化すると指摘する。とりわ

けケア役割を期待されることのなかに、賞賛されかつ見下されるという両義的なものが横たわるといふ。冒頭に述べたエッセンシャルワーカーは賞賛されるが評価が低い(医師は除く)という矛盾のなかにある。給料が低いことも含めて政策論議の対象となっていることを考えればわかりやすいだろう。

こうした認知の非対称性は、もう一つ大きな領域での不可視化をもたらすとソルニットは指摘する。それは加害者のことである。筆者も加害者臨床で常に体験していることである。それは暴力や虐待についての独特な加害者のナラティブについてである。「アルコールの飲み過ぎで、薬物に依存して、頭が真っ白になって、瞬間湯沸かし器みたいに」等としてその時の状況を語る。さらに刑事事件の判決文でも「感情に任せて暴力を用い」という言葉が頻出する。要するに、自分ではコントロールできないようなものに支配されて暴力を振るったというのが素人も裁判官も使う論理だ。これが社会的に流布している説明の仕方である。これをソルニットは「加害者が行方不明」(2021:229)と皮肉ったのだ。

ジェンダー秩序が強く存在し、男性的特権のある社会では暴力の加害者であることの多い男性はこうした動機説明の次元から保護されている。つまり、暴力の原因を責任ある人間に帰属させるのではなくコントロールできない感情に帰属させる理屈となっているのだ。こうした言い方を許容している社会は加害者と共犯関係にあるともいえる。ここに加害のナラティブの特徴がある。つまり、度を越したという意味での暴

力は認めるけど、加害は認めないという男性をつくりだす。

他にもこんな例がある。「もうそのときは頭が真っ白で」、「瞬間湯沸かし器みたいに点火し、爆発するんです」、「小さいときからの癖でどうにもできない」、「男ってこんなもん。みんなそうですよ」、「気がついたら手が出ている。身体反応です」、「落ち着くと謝るんです。もうしないって」、「暴力は相手が悪いから必要なんです」、「悪いことしたら殴ると以前から話をしていたので同意だといえますよ」という具合だ。

筆者は他にもある言い訳を対象に、次のように類型化した言葉を付けて整理してきた。ハイフンのあとは加害のナラティブを考察するために抽出した概念である。

- ① 「その怪我はたまたまなげたりモコンが跳ね返ってあたっただけなんです。」—過失を強調するが暴力を招き寄せるようにして生きている—
- ② 「それは些細なことからだったんです。」—過小化
- ③ 「これは指導、しつけの一環である。」—マイルールの存在と正義の暴力
- ④ 「相手のために思えばこそ。」—境界を侵犯するレトリックとメタファー
- ⑤ 「自分こそ被害者だ。」—他罰性
- ⑥ 「暴力はコミュニケーションである」—暴力を振るう男性の理解の鍵
- ⑦ 「二人の問題であるし、家族の問題ですよ。」—私的領域の特権化と相互責任の強調
- ⑧ 「社会は関係ない。」—自力で解決できるし、家のなかのことは放っておいて欲しい
- ⑨ 「暴力は愛情の証し。親しいからこそ。」—男と男の関係由来

こうした暴力の言い訳は、特定の関係性のなかでは相手を責めることになる。言葉の暴力や心理的暴力である。特に非対称な関係において他方の側がケアする立場があると追い詰めるコミュニケーション行為となる。

たとえばこんな事例がある。小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』(講談社、2021年)で紹介されていた小説の一節だ。温又柔の『魯肉飯のさえずり』(中央公論新社、2020年)での話。桃嘉(ももか)の結婚と離婚の物語である。夫は桃嘉が作った台湾風豚肉煮込みご飯・魯肉飯(ロバパン)を嫌い、「これは日本人の口に合わない」と毛嫌いし、「ふつうの料理」のほうが好きだと言う。夫は、自分にとっての「あたりまえ」を押しつけるが、日本人全部を代表するのはおかしいだろう。

確かに食文化のすれ違いはありうるとしても、それを埋めるコミュニケーションの仕方や言葉選びをとおしてその懸隔は埋められていくはずだ。しかしこの夫婦の場合はそうではなく離婚に向かう小さな亀裂となっていく。日本人を代表して台湾の日常の食べ物を退けてしまうとは。まるで「蟻の一穴」のようだ。コミュニケーション行為をとおして現れ出る小さな齟齬が関係を崩壊させていく。日本人の嗜好に合わないとして台湾の庶民の味を否定した夫に加害の自覚はない。加害に無自覚なという意味でのマイクロアグレッションあるいは無意識のバイアスそのものだといえる。同じようにこのコミュニケーションにおいても加害者は行方不明だ。

### 3. 無責任なコミュニケーション行為—「好きにしていよ」

こうしたコミュニケーションは日常生活のコミュニケーション行為に埋め込まれている。身体への暴力ではないが、「蟻の一穴」となるような破壊性がある。こうしたことは日常茶飯事であるのだからさらに厄介だ。いくつか例示しておこう。

女性相談・子育て相談をしている知り合いの相談員がこんな事例があったと話してくれた。もうすぐ下の子が小学生になるので、そろそろパートをしたいと考えていて、夫に相談をしたところ、「好きにしていよ。」とだけ返事があったという。そのやりとりに妻は怒りが湧いた。物わがりのよい夫の無責任さを感じたという話だ。そうしたことを言い出しにくいそれまでの関係が背景にあるのだろう。妻はその怒りを飲み込んで相談に来たという。コミュニケーションができている夫婦ならそうなった場合の生活の仕方について話をすすめていくはずだ。

妻がパートにでるということは、夫になにがしかの役割を分担してもらうことになる。「好きにしていよ。」という言葉の次に、「じゃあ、僕は家のことで何かしよう。」という言葉が出てくるべきなのだと思ったと妻はいう。そうしないと好きにはできないからだ。妻の負担が増えるだけだから。これは夫婦喧嘩の元になるかも知れない。夫は「些細なこと」だというだろうし、悪意はない。でも妻は違う。こうしてコミュニケーションがずれていく。こうした例は枚挙にいとまがない。コミュニケーションの微細な懸隔である。ネットで紹介されてい

るリアルな体験だ。そのまま紹介しておきたい。

○「良いパパなんだけど……夫の“育児”が狭すぎる問題——子育て歴4年半の夫の衝撃発言を聞いてください。」というネット記事を紹介しておこう(戸木 亜沙美 BuzzFeed Staff, Japan) BuzzFeed<https://www.buzzfeed.com/jp/asamitogi/ottonoikuji>, Nov 18, 2021.

夫の“育児”はあまりに狭い: 育児って、やるのがてんこ盛りじゃないですか。食事にお風呂、夜泣き対応もあれば、毎晩おもちゃの片付けもある。どんどんサイズアウトする服の買い足し、予防接種のスケジュールリング、保活に入園準備、園のプリント整理に、イベントや提出物の管理。さらにはファミリーサポートや病児保育に登録したり、習い事をリサーチしたりと暇がありません。それを夫はわかってない。子どもたちを園の送るのは夫の担当。毎朝夫が子どもたちに荷物を持たせ、夫が自転車で送ります。毎朝です。毎朝やってるんです。それなのに毎朝のように聞かれます。「このバッグは持っていくの?」「今日はお弁当いらないんだけど?」「この帽子って必要?」いやいや、毎朝やれば園にもっていく荷物くらいわかるでしょうよ。でも夫はわからない。だって覚える気がないから。自分のタスクだと思っていないから。ただ送り届けることだけをタスクだと思っているから。こんな育児してるって言えます?「俺、お腹すいてないわ!とある休日、家族でドライブしていたとき「夕食どうしようか」と私が尋ねたときに言われたセリフです。いや、別に、ごく普通の返答なんですけど。でも私は驚きました。だってこの日、子どもたちは昼食をほとんど食わず、お腹が空いているだろう状況だったんです。だから私は「子どもが食事できる場所はどこか」ということばかり考えていたんです。子どもが産まれてからというもの、私は食事や睡眠を子どものリズムに合わせて生活

してきたように思います。そうしないと子どもが機嫌を損ねたり癇癪を起こしたり、かえって大変な状況を招くからです。でも夫はそうじゃない。食事は自分が食べたいときにするものでした。そうか、君はまだその世界線を生きていたのか……。

○ワンオペ育児

すぐキレる旦那で困ってます。きっかけは些細なことです。私がうるさく色々文句や愚痴を言うからです。子どもの前でも容赦なくキレて物にあたって家中がごちゃごちゃになり、子どもも号泣して旦那を止めるのですが止まらず、一度警察にお世話になっています。

私は専業主婦で、下の子がまだ小さいので、働きに出ることは考えていません。旦那も子どもは可愛がっていますが、私のことがとても煩く思っているようで、本当なら離婚になってもおかしくないとは思いますが、子どもがいるのでなかなか踏ん切りがつかえません。できれば、うまく夫婦関係を継続したいのですが、何か良いアドバイスはありませんか?私も愚痴や文句も、以前に比べると、あまり言わなくなってきたように思います。2人の会話やノリの中で冗談の延長戦で、普段の愚痴を言うとそれが琴線に触れるようで、キレにつながるようなのですが、その琴線がわたしには分ならず。もうあまり会話もしたくないのですが、通常時は旦那は私とコミュニケーションを取りたがるので、またここで機嫌が悪くなるとダメだと思い、会話すると喧嘩につながったりします。もちろん普通の会話で終わる時もあるのですが、何がダメなのか全く分かりません。どうしたら良いのでしょうか。(Yahoo!知恵袋)

○自分の思い通りにならないとすぐキレる旦那って幼稚過ぎませんか?2児の母で現在妊娠8ヶ月です。育児はたまーに手伝う程度で、出先ではイクメンのふりをします。家事は一切手伝いません。ご飯の時間を聞いても携帯ばかりで生返事をしてい

たのに。例「7時に食べると言ったよな?もういい。何もなくて。何もしたくないんだろう」何時に食べるのか聞いてもハッキリ答えなかったくせにこの言い様はなんなんでしょうか。結婚してから偉そうな感じは気になってましたが、妊娠中にまで命令口調で色々言われてお腹が痛くなります。

(Yahoo!知恵袋)

○イクメンを自称する旦那に腹が立ちます。  
イクメンを自称する旦那に腹が立ちます。1歳の子どもがいます。私は専業主婦として育児と家事を行い、旦那は在宅で仕事をしています。毎日ご飯を作って食べさせ、遊ばせ、オムツを変え、検診につれていき、お風呂に入れ、寝かしつけるのは私の仕事です。これ自体は何ら問題ありません。しかし友人や私の親に会った時だけ子どもと遊び、「俺イクメンなんで笑」とドヤ顔する旦那に心底腹が立ちます。人前でだけ子供に積極的で何がイクメンだと思います。また、オムツ替え等も「汚い」「無理、できない」と言ってしないので本当に子供と遊ぶだけです。子どもも旦那からの接触がほとんどないため旦那に対してギャン泣きします。最近では冷めた目で旦那を見るレベルまでなりました。とりあえずイクメンを自称したいなら育児をすればいいのと思うし、もしくは自称するなと思います。気にしすぎでしょうか? (Yahoo!知恵袋)

ここで批判されている夫たちには共通点がある。非対称な関係性に依拠していることの自覚に欠ける点である。エッセンシャルワーカーとしての妻・母の役割に無頓着で、自分が中心となっている。そして社会の共犯関係性も背景にある。イクメンとしてもてはやす社会も問題だろう。対比してイクウィメンという言葉はない。妻や母のことは同じようにはもてはやさない。むしろ逆である。虐待した母親に向かう「鬼畜

のような母」というイメージが虐待事件の度に喧伝される。介護する男性も同じだ。あまり流通していない言葉だがケアメンも同じだ。対応してケアウィメンとは言わない。対になる言葉がない時、一方のカテゴリだけに強調があるといえる。そこには関係の非対称性がある。エッセンシャルワーカーとしての主婦や女性はカウントされていない、つまりサイレンシングが作用することを考え合わせるとわかりやすい。ケアの領域に参入する男性は評価されるが逆はない。とりわけ家庭内エッセンシャルワーカーはきちんとやって当たり前なことなのだ。エッセンシャルワーカーへの評価はとりわけ家庭内で低い。

#### 4. ケアする側とされる側の反転—男性がケアをさせてもらえない事態

誰がケアし、誰がされるのかという非対称性さの基本線が浮かびあがったのは筆者の息子介護者としての最近の経験も同じようだった。エッセンシャルワーカーとして長く生きてきた母親が要介護になった。この場合は少々複雑な経過をたどる。

私的なことだが体験として一般化できる課題があるので紹介しておこう。2021年4月下旬、87歳になる母親が硬膜下出血で救急搬送され手術を受けた。それは無事に終了したのだが、前回の判定から認知症の進行もみられ要介護度があがった。転院して地元の主治医のいる病院のリハビリ科に入院した。いままでの在宅での介護サービスを利用した独居暮らしは難しい事態となった。入所施設を探すこととした。その後、認知症が進んだこともあり、一人暮らしの在宅介護は心許ないという担当ケアマネジャ

一のすすめもあり特別養護老人ホームへの入居申込みをしていた。介護保険の法律はよく変わるが特養は要介護度の高い人を優先する。三ヶ月程の待機で地元のホームに入居することになった。2021年9月にひっこしとなった。しかしコロナ対策で面会ができない。地元の間人もだめだという。ひっこしも家族は手伝えない。すべて施設同士が担当するという。家族は単に契約にいくだけだし、面会はオンラインだ。他府県の私はオンラインで対話をする事となる。果たしてうまくいくか。

特養ホームまでつなぎの施設はサービス付き高齢者住宅(サ高住という)である。考えてみると、緊急手術をした病院—リハビリ科のある地元の病院—しばらく在宅での生活—サ高住—特養ホームを転々としていることになる。この経過のなかで息子介護者問題(異性介護問題)を体験した。なかでも転々と居場所を変える「リロケーションストレス」への対応には苦慮した。めまぐるしく続く環境の変化、そして認知症が深化していることもあり、ついていくことができないかも知れないストレスだ。当然のことだろう。忍耐強く付き合いながら対話になりにくい対話を試みる。

話をしながら、仏壇の心配と90年住んだ家の心配があることは当然のこととして、まだ自分で一人暮らしができ、自立しているという認知症特有の思いが強いということも分かってきた。老いるということの意味を教えてくれているようでもある。地元は三重県の伊勢志摩なので遠距離介護体験となる。地元に住む弟夫婦らと協働している昨今だ。遠距離になるが授業や会議がオ

ンラインでできることもありこの面では助かる。

もちろん病院も福祉施設もコロナ禍で面会ができない。施設の入り口でタブレットを使ったデジタル面会がせいぜいだ。意思疎通がさらに困難になる。コロナ禍で認知症の高齢者とオンラインで対話することになろうとは。性急に話を進めようとしなないことが大切だと分かる。弟夫婦の子どもが地元の市役所に勤務しているのでアドバイスもらったり、近所の付き合いに支えられたり、担当のケアマネジャーのネットワークに感心したり、地域医療に熱心な主治医の仕事に敬服したりしながら地域福祉の重要性を実感している。そして転々とした暮らしも落ち着き、地元の特養ホームでの生活となった。

こうした経過で体験したことが息子介護・男性介護問題である。男性であることがケアされる母親の意識にのぼる。息子に母は介護をされたくない様子なのだ。特に排泄の介助は嫌がる。当然だろう。女性による介護を望んでいることがわかる。そういえば、認知症の兆候がでて、足腰が弱りだしたこともあり、実家に帰るたびにトイレ掃除をし、母の手の届かないところにはたきをかけて綺麗にしようとしたのだが、その時も、あまりよい顔をしなかった。特に、冷蔵庫の整理や台所の片付けは嫌がっていたことを思い出す。

長く家を切り盛りしてきた母親が息子にそんなことはさせまいとしていた意識なのだろう。この嫌悪感はどこからくるのだろうかとその時から考えるようになった。そして今回の介護拒否的な態度だ。90歳近い女性の家族への思いが垣間見える。

とはいえ老いた身体の実現と認知症の進行はそれではすまなくなる。在宅介護を続けていけばいずれはそうした関係も変容していくのだろうし、息子介護だとしても受け入れてくれるのだろう。弟の妻による介護はすんなり受け入れている。同性だからだろう。息子介護の受容は、私の介護技術の次元のことではなく存在している長くケアをしてきたエッセンシャルワーカーとしての母親の気持ちと自ら折り合いをつけないければならない意識なのだろう。

男性問題研究からするとやはりユニークな体験をしていることになる。この歳になって息子という立場が躍り出る。ケアマネジャーらには息子さんといわれる。息子介護は、夫介護とならんで男性介護問題としてホットなテーマだ。実家に帰る機会が多くなる。そこでは親族や近所の人たちも同じく私を息子としてみる。あたりまえだが京都にいとそんな立場は前にでてこない。なんだか子ども時代に戻ったみたいだ。

伊勢志摩は海の幸が豊かで食べ物がかたく安くて旨い。しかしそれを長い間、手料理で振る舞ってくれた母と食卓を囲むことができない。一時帰宅も許可されないからだ。唯一この点が同じ息子でも以前とは異なる。寂しい感じがする息子だし、ケア役割を担ってきた母親もそう思うのだろう。長くケアしてきた側が老いてケアされる側になる際の心理と意識への配慮が求められると思った。

つまり、ケアの関係に息子や夫が介護者として取り組む場合の齟齬がある。筆者の介護技術問題とは別に、ケアを受け入れる側の心理的準備の課題もある。それを埋めていく作業が男性介護者問題の一角にある

のだろう。そしてこれは先に紹介してきたコミュニケーションが微妙にずれる無頓着な夫たちとはまた異なる位相にある事項だと思う。ケアする者の配慮、ケアされる者の逡巡である。

## 5. 親密な関係のなかに隠れていく加害

ケアをめぐる家族同士の葛藤、虐待や暴力は日常生活に埋め込まれている。ここを震源にして小さな齟齬が大きな変化へといたる。親密な関係におけるコミュニケーション行為のマイクロな懸隔は心の壁や機微に関わる繊細なものでもあるとして放置できない。コミュニケーション行為から生成する暴力性を帯びることがあるからだ。コミュニケーションは相互行為なので互いに拘束しあう駆け引きのようなことも含む。次のような事例がそうだ。加害者臨床で出会うひとたちには相互行為の境界設定が混乱していることが多い。男性の側のコミュニケーションにもとづく相互行為のなかに、愛情、嫉妬、束縛、依存、嫌悪、忘我等が混在する。筆者の相談記録ノート（被害者聞き取り）から紹介しておこう。こんなことを聞いてきた。

1. 「自分のものを買うときにいつも一緒に付けてくる。僕の好みの女性になってほしいと言う。自分が自分でなくなっていく感じがする」
2. 「交通の便の良くないところに住んでいるので本当は免許が欲しい。必要なのに、免許を取らせてくれない。運転が下手だからって言う。だからいつも彼の車で行動することになる」
3. 「習い事をしていると言うと、それは男性から教わるのかって聞いてくる」
4. 「同窓会に行くと言うと嫌な顔をする」

5. 「DV を受けているのに彼といる方が安全だと思ふような意識になったことがある。実家に逃げていると追いかけてきたり、メールが頻繁に入ったりするので結局一緒にいることで落ち着くから」
6. 「今日は何をしていたのかといつも聞いてくる」
7. 「『死んでやる』。と言われると別れられない。元の関係に戻ることが多い」

加害者臨床ではこう考える。こうしたコントロール型のコミュニケーションに加害者が隠れており、「加害者が行方不明（不可視）」になる。言葉を換えると親密な関係性に隠れていくといえる。暴力が生起するコミュニケーション行為には、暴力を振るう人々の生活の仕方、思考の枠、問題解決のやり方が反映されている。

こうした過程をみても非対象な関係性に根ざして自らの立ち位置を理解することが大切となる。「行方不明の加害者」は社会がその非対称性のなかに宿す権力性の勾配の上に無自覚にあぐらをかいている。社会が保持する暴力容認の陰に隠れていく。無意識のバイアスやマイクロアグレッションとして指摘されていることがそれである。

### <閑話休題>

ジェンダー平等が世界一位のアイスランドの映画「〈主婦〉の学校」(The School of Housewives、監督・脚本はステファニア・トルス、アイスランド、78分、2020年)を観た。「自分ごとの、家しごと。」とキャッチコピーがついている。1942年から現在まで続く男女共学の家政学校「主婦の学校」の記録映画だ。

この学校はアイスランドのレイキャビクに1942年に創立された。寮で共同生活を送りながら生活全般の家事を実践的に学ぶことができる。一学期(三ヶ月)定員24名の小さな学校だ。かつて、義務教育後に進学の手が少なかった女性たちを、良き主婦に育成することを目的としていた家政学校(花嫁学校)は世界のあちこちにあった。その多くが衰退していくなか、この学校は、1970年代に男子学生も受け入れて男女共学となり、現在まで存続している稀有な存在だという。今では「主婦になるために行くわけじゃない」「自分のことは自分で面倒を見られる人間になりたい」と、性別に関わりなく、「いまを生きる」ための知恵と技術を求めて学生たちが集まってきている様子が丁寧に描かれている。

時代の移り変わりと共にその役割を変化させてきたという。1990年代には男性も受け入れ男女共学となった。驚いたのは学費。定員は24名、三ヶ月の住み込みの学校生活にかかる費用は学費で40万円、寮費が63000円だという。それなりに高い。85%の出席で卒業となる。8時30分に始まる朝食から学校が始まる。映画の冒頭のインタビューで「自分のことは自分で面倒を見ら

れる人間になりたい。」と語る若い女性が印象的だ。

アイスランドは男女平等の世界ランキング 12 年連続 1 位である。ちなみに日本、2021 年度は 120 位。比べものにならない。この映画を撮った女性監督のステファニア トルスも、女性が社会進出している現代に最初はわざわざ家庭科を教えるなんて時代錯誤と思ったとインタビューで語っている。しかし「主婦」の仕事こそがいま求められている持続可能な社会づくりと重なりあうと判断したタイトルだと語る。SDG's に先駆けること 70 年前になる。70 年代からは「家政学校」と改名をしているにもかかわらず、映画のタイトルは設立当初の「主婦の学校」にしたという。エッセンシャルワーカーへの敬意ともとれる。コロナ禍の Stay Home 時代にこそ相応しいと思ったのが見終えた感想だ。「良い奥さんになるために入学するのではない」と学生たちは話す。もちろん若い人だけが学んでいるのではない。

この主婦の学校、男性にこそ必要なものだったと思った。かつて「花婿学校」という取り組みがあったことを思い出しながら観ていた。横浜市女性協会の主催だった。樋口恵子・板本洋子・斎藤茂男編集『花婿学校—いい男になるための 10 章』（1990 年、三省堂）が成果としてまとめられている。主催者の板本洋子さんに請われて講師をつとめたことがある。

講座では DV やデート暴力の話をした。もう 30 年前になる。少子高齢化とともに進行する男性の結婚難が焦点だった。本来の

意味での花婿修行こそが必要なことだと語っていたことを思い出す。家族を成して生きていくことの重要性を伝える修練の場所のようでもあった。さらに男性に対しては、結婚願望、結婚して一人前意識等を払拭するというねらいもあったようだ。花嫁修業なんか吹っ飛ばしてこれからは花婿学校だという個性的な取り組みだった。結婚願望に囚われないようにすべきこと、これからは離婚もありうるのもその心づもりもしておくべきこと、DV や虐待についての法制度や社会問題としての理解、家族中心社会ではなく個人の尊重等にくわえて、コミュニケーションの練習、料理教室や介護の基礎知識等の実践もしていた。

「行方不明の加害者」に自覚を促すポジティブなアプローチとしての花婿学校を再開したいと思いつつ観ていた映画である。

立命館大学教授  
社会病理学・臨床社会学  
2021 年 11 月 30 受理

# 東京都女性相談センター通信

第42号 令和2年9月 日 編集・発行：女性相談センター

## コロナ禍におけるDV問題の加害と被害

立命館大学教授／内閣府女性に対する暴力専門調査会委員

中村 正

新型コロナウイルスの影響で、外出自粛や経済不安が長期化する中、DV被害や児童虐待の相談は今後も増加することが危惧されます。DV被害女性等の支援者においてもコロナ禍におけるDV被害の現状や背景について理解を深め、DV被害者に対し適切な支援を行っていく必要があります。そこでDVについて長年、研究を行ってきた中村正先生にコロナ禍におけるDV問題の現状や今後の課題について御寄稿いただきました。

### 【相談の現状】

DV被害対策もコロナ禍で臨時に講じられている。相談件数は増えている。速報値によるデータは次のようだ。

表1 配偶者暴力相談支援センターの相談件数  
(内閣府資料・7月27日までの速報値)

2020年4月	13,471件 (前年同月比30%増)
5月	13,259件 (前年同月比20%増)
6月	12,450件 (前年同月比20%増)

さらに「DV電話相談+ (プラス)」も設けられた。4月20日から7月26日までの98日間の件数は次のようであった (内閣府速報値)。

表2 DV電話相談+ (プラス) の件数  
(内閣府資料・7月27日までの速報値)

電話相談	9,524件 (一日平均97件)
メール相談	2,431件 (一日平均25件)
SNS相談	2,286件 (一日平均23件)

コロナ禍でStay Homeといわれている。仮に、留まりたくない家庭だったらどうすればいいのかという想像力は大切だ。DVや虐待がある家庭の被害者にそ

れでも留まれといえるのか。家を出た方がいい家庭もあるし、暴力ですでに避難している人もいる。もちろんDV問題だけではなく一般的にもコロナ対策と家族について考えるべきことは多い。テレワークが推奨され、学校に行けずにオンライン学習となると、Homeは生活まるごと抱え込む。そこをいったい誰がキープするのだろうか。女性依存・妻依存・母依存の様子が目に浮かぶ。Stay Homeの新しい生活様式は、古くからある家族主義を強化しただけなのかも知れない。

コロナ対策もそうだが、世帯を単位に福祉サービス等が構成されている。たとえば10万円の特別定額給付金政策がある。先の相談件数にはこの点に関する問い合わせは除かれている。実はこの問い合わせにこそDV問題が含まれているだろう。相談の実数は先の数字より多いだろう。DVや虐待で家族から逃れている女性や子どもは現住所以外に住んでいるはずなのできちんと本人に渡ったのだろうか。マスクの配布もそうだったが、これらはすべて「世帯単位」だった。その世帯に暴力等の様々な困難が含まれている人たちはどうだったろうかと考えてみる。

〔次項へ続く〕

### 〔考察〕

こうしたコロナ禍のDV事情は世界も同じである。世界中で、ロックダウン（都市封鎖）、外出自粛そしてStay Home政策がとられている。UN Women(国連女性機関)が発表している「COVID-19と女性・女兒に対する暴力報告書」から引用しておこう（6月20日段階）。たとえばフランスはDV30%増加（ロックダウン（3月17日）以降）、ヘルプラインの電話等で、キプロス30%増、シンガポール33%増だという。アルゼンチンでは緊急相談が25%増だという（3月20日以降、いずれも前年同時期比）。カナダ、ドイツ、スペイン、英国、米国では緊急シェルターへの入居要請が増加しているという。

虐待問題からDV対策との関連をつける必要性の指摘がある。被害者は子どもだが、母親もまたDV被害者といえる千葉県野田市の事件もそうだった。家族は夫の強いコントロールのもとに置かれていた。これと重ねると、Stay Home政策は家族の凝集性を高める。家族的生活が強まっていく。特に面前DVがコロナ禍で増加していると推測できる。この一番の問題は子どもが夫婦の姿をとおして男女関係の基本を学習してしまうことにある。もちろん心の傷となるが、その傷は暴力行動や攻撃行動として発現することもあり、多面的な影響を与える。これは発達被害といえるだろう。こうして家族はジェンダー学習の特別な場所となる。暴力の再生産に他ならない。関係性の家庭学習である。虐待する父親の多くは子どもの頃、暴力を受けていたと指摘されている。私の男性相談（虐待とDVを振るう父親向けのグループワーク「男親塾」）にやってくる人もそうした人がほとんどである。

さらに経済的影響も女性が受けやすい。もともと脆弱な層、失業等が重なると何重苦にもなる。貧困の女性化と貧困の隠蔽がある様子がみえてくる。UN Womenは「コロナ禍で見えてきたジェンダー平等問題」と指摘している。

この報告書によれば、経済的不利益とジェンダーの重なりは、元来、女性が多い職業分野で打撃が大きいことからわかる。たとえば、家事労働分野は女性が70%を占めているがすでにそのうち80%は職がない。さらに宿泊や食を伴うサービス業領域も54%が女性で同じように職を失いつつある。助産師、地域保健師、看護師、介護等、健康にかかわる職も70%が女性、感染対策の最前線にいる女性たちの健康の危機は高く、感染リスクは平均より3倍高いという。また、イタリアのケア労働者の72%は移民労働で成り立ち、なかでも移民女性やマイノリティ女性が多く、失業のリスクに曝されている。

これは日本も同様だ。私たちが暮らしていくのに必要なことにかかわる仕事がたくさんあり、Stay Homeが可能になるにはこの人たちの働きが欠かせない。生活必需品を購入できるのは農家や漁師、食品製造業などが生産活動を続け、コンビニやスーパー、ドラッグストアなどが営業しているからだ。

ネットの存在感が高まるが、それを支える仕事も数多い。ドライバー、宅配業者、デリバリースタッフだ。この人たちの子どもを育てる保育関係者もそうだ。求人動向を見ても、介護、看護、ドラッグストア、スーパー、コンビニ、デリバリー等の分野は急増しているという。ジェンダー社会のなかでエッシャルワークは女性に多く割り当てられてきた。

他にもコロナ禍は日本社会の持つ社会病理を際立たせている。①こうしたエッシャルワーカーへの圧力、②DVや虐待の家庭内暴力、③サイバーバイオレンス（感染者や医療関係者への差別、偏見、憎悪）、④自粛という名の規制や移動制限等があり、これらへの対応が重要だろう。

なかでもDVや虐待は、コロナ禍だから増えたということだが、もともとそこにあった問題が顕在化している面もある。しかし、悪化している面も無視できない。①脆弱さに拍車がかかること、②隠蔽されていた女性の貧困が家庭に閉じ込められるのでより深刻になること等、コロナ禍で家族に閉じ込められていた見えない問題が浮かびあがってきたということだろう。いくつかの社会病理も含めていえばジェンダーをとおして家族に問題を閉じ込めてきたという意味での「家族のダークサイド」の存在である。

こうした事態に対して、物理的な距離を置くソーシャルディスタンスではなく、Home以外のソーシャルコネクションのいろいろなかたちが大切となる。これがないと距離を置くことが社会的孤立を深めるだけになる。家族以外の安心・安全のための人間関係をつなぎ直していく新しいコネクションとシェアリングの機会になるといだろう。「夜の街」がシェルターのような「避難所」となっていた人たちやネットカフェに居た人たちも同様に、家族という意味でのHomeが安心・安全ではない人たちが居ることができていた場がロックダウンされているのでその欠落を補うこともコロナ対策だろう。コロナ禍で街が閉ざされていくと、家族に閉じ込めていた「ダークサイド」がみえてくる。家族にすべてを依存するコロナ対策ではない工夫を凝らすことで社会活動とコロナ対策の両立を図る時期へときている。DV・虐待対応はStay Home政策の一面性をつきつけている。家族や家庭という形態の絆や場だけではなく、また別のかたちのコネクションをつくる機会になるといいだろう。

### <執筆者紹介>

中村 正（なかむら ただし）

所属：立命館大学教授、立命館大学教養教育センター長、内閣府女性に対する暴力専門調査会委員

研究分野：社会学、社会病理学、臨床社会学、社会臨床学、男性学

